

第8回 世界最大のコンゴ紛争、 私たちとのつながり

パナソニック提供龍谷講座 in 大阪
～今、あなたに知ってほしい世界の現実～
2010年度 社会貢献・国際協力入門講座

日時 7月14日(水)午後7時～8時30分
会場 龍谷大学大阪梅田キャンパス研修室
講師 ヴァージル・ホーキンス 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教
URL <http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/index.html>
(大阪大学グローバルコラボレーションセンター)



第8回の講師を務めていただいたのは、大阪大学特任助教のヴァージル・ホーキンスさんです。

「コンゴ民主共和国(DRC)の紛争の紹介」、「コンゴ民主共和国と私たちのつながりを探る」、「私たちは何ができるか考える(ワークショップ形式で学ぶ)」と進みました。

世界最大の紛争

コンゴ民主共和国の紛争が「世界最大の紛争」といわれているのは、冷戦後20年近く世界で起こっている紛争の中で死亡者数が最も多いからです。死亡者数は540万人といわれています。この紛争の前兆として、1994年にルワンダ共和国で起きたフツ族によるツチ族に対する大虐殺があげられます。

1996-1997年 第一次紛争

大虐殺の後、ザイル共和国(現在:コンゴ民主共和国)に逃げた多くのフツ族が難民になりました。その中に反政府軍がいました。ルワンダ政府は、ザイルにいる反政府軍の活動に制圧をかけました。その時、アンゴラ共和国やウガンダ共和国、ブルンジ共和国各国にとってもザイルにそれぞれの反政府軍がいたため、ルワンダと手を組み、参戦しました。結果、ザイルが敗北し、新しい政権がザイル共和国から「コンゴ民主共和国」に改名しました。

1998-2003年 第二次紛争(アフリカ大戦)

再びルワンダが中心となり、コンゴ民主共和国への侵攻を開始しました。しかしコンゴ民主共和国政府は、アンゴラやジンバブエなど周辺数カ国から、軍事支援を得て大きな大戦へと発展しました。そのため、今度はルワンダやウガンダからの攻撃を抑えることができました。その後、膠着状態が続き2002～2003年に包括的な和平合意がされました。

2003-現在

2003年までに周辺国軍が撤退完了し、暫定政府が設立されました。2006年には総選挙が行われ、現職のジョセフ・カピラ大統領が当選しました。一方で、イトゥリ州と北キヴ州を中心に地方レベルの紛争が続きます。そのため、不安定な「平和」になっています。

この紛争は新聞などでは、「内戦」と呼ばれています。しかし実際は、「直接軍事投入8カ国」、「間接的関与11カ国以上(例:お金や武器の投入)」、「他国から複数の反政府勢力が活動している(「国境なき武装勢力」)」が現状です。また国際連合の調査の結果、20カ国以上(ヨーロッパ、アメリカなど)からの企業が紛争と関連したビジネスに関与していることが分かりました。NGOによる調査結果からは、アメリカ・中国・ロシア・南アフリカなどからの弾丸が発見されています。以上より、アフリカ大陸の多くの国々が参戦している国際紛争、政府と政府を倒そうとする反政府勢力の「国」をめぐる紛争、国や政府とは関係なく、資源や権力などをめぐる武装勢力同士の戦いであるローカル紛争があり、コンゴ民主共和国の紛争は一つの紛争ではないといえます。

またこの紛争の人道被害ですが、死亡(540万人)原因が軍による被害はたった6%です。残りの94%は、病気や飢えの非暴力です。紛争では一般市民が狙われます。その狙われた人々が逃げる場所には、食べ物や水、保健サービスなどはないため、飢えや病気にかかることがあげられます。また、地域によっては約70%の女性が性的暴力を受けています。

日本の対応

政策レベルでは、日本政府のコンゴ紛争に対する 1999 年 1 年間の緊急支援は、コンゴ民主共和国の紛争に対する緊急支援の 1999 年からの 10 年間分に相当します。メディアレベルでは、朝日新聞ではイスラエル・パレスチナ紛争の 1 カ月分の報道 (2009 年 1 月) がコンゴ民主共和国の紛争の 10 年間分以上の報道です。一般人レベルでは、大阪大学 1 年生の知識調査 (2008 年) の結果、コンゴ民主共和国の紛争が世界最大の紛争だと知っていたのは 151 人中 0 人でした。これらのことより、ホーキンス講師は「この紛争は無視されているといっても過言ではない」と日本の対応について説明しました。

私たちとのつながり

コンゴ民主共和国の鉱物資源と紛争は密接に関係しています。日本で使用されているパソコンやゲーム機、携帯電話などの電化製品の中にある電子回路 (例: ハンダ・コンデンサ・IC チップなど) には欠かせない部品があります。その部品にコンゴ民主共和国に大量にあるような鉱物資源 (例: スズ・タンタル・コバルトなど) が使用されています。この鉱物資源と紛争のつながりから、日本ではこの紛争を「プレイステーション紛争」といわれたことがありました。これは、2000 年のタンタルの危機と関連しています。この時期にプレイステーション 2 が発売されました。それが一つの原因でタンタルの需要が膨らみ、タンタルが不足し、値段が高くなりました。するとタンタルが取られる鉱山の奪い合いになり、紛争へと発展してしまいました。またタンタルやスズは石油などとは違いスコップさえあれば、取ることができます。

日本はタンタルを直接、コンゴ民主共和国から輸入していないため、繋がり意識が低いのが現状です。しかし、コンゴ民主共和国の鉱山で採れた鉱物資源はアジア (日本は含まれない)・欧米に輸出され、コルタンからタンタルへ加工するところから日本の企業が関与している可能性が高いのです。

私たちは何ができる？

まずこの紛争に無知・無関心である状態から、この問題を意識し関心を持ち、行動に移していくには、どうすればいいでしょうか。そのためにも、たくさんの人に「紛争の被害で苦しむ人々の悲劇」、「日本の電子機器の原料は紛争とつながっている」などの事実を知っていただくかなければなりません。またホーキンス講師は、コンゴ民主共和国の紛争への対応 (マクロレベル) をボトムアップ (個人の気づき・行動) から変えるために以下の流れを提示しました。

多くの人が知る (=関心が増える) メディアが関心を持つ (=報道量が増える)
企業が意識し、原料の入手方法が変わる。政府は関心を持ち、緊急支援が増える
NGO などに資金が流れる (=人道支援活動が増える)

そして最後にグループワークで、「どのようにして個人の気づき・行動をマクロレベルの対応にもっていけるのか」について 3~4 人のグループでアイデアを出し合いました。アイデアとして、映画をつくる、携帯電話のリサイクル、学生団体をつくる、mixi でコミュニティを作り情報を発信していくなどの案がでました。

参考文献・web サイト

大津司郎 (2010) 『アフリカンブラッドレアメタル』 無双舎

白戸 圭一 (2009) 『ルボ資源大陸アフリカ』 東洋経済新報社

米川正子 (2010) 『世界最悪の紛争「コンゴ」』 創成社

FinnWatch (2007), Connecting components, dividing communities: tin production for consumer electronics in the DR Congo and Indonesia

Global Witness (2009), Faced with a gun what can you do: war and the militarisation of mining in Eastern Congo

Hayes, Karen & Burge, Richard (2003), Coltan Mining in the Democratic Republic of Congo, Fauna & Flora International,

「ステルス紛争」ブログ <http://stealthconflictsjp.wordpress.com/>

Stealth Conflicts: <http://stealthconflicts.wordpress.com/>

Tin Soldiers: <http://www.youtube.com/watch?v=1o8c81xHlMw>